

AIと共に働く力を 何に向けるのか

資料づくり、顧客対応、日々の判断をAIと進める人へ
背景・目的・考え方を共有する、パートナーとしての共働



できる仕事広がるほど、
誰の、どのような現実を変えたいかが大切になる。

目的を捉えるところから、方法の比較、実行、見直しまで。その力が関わる人に
何をもたらすかを、AIと共に確かめる進め方を提案します。

資料制作の対話を手掛かりにした、共働の進め方の考察

背景と目的は、方法を選ぶ拠り所

三つの言葉を、実際の仕事で何を選ぶかにつなげて考えます。

背景

誰に何が起きていて、なぜ取り組む必要があるのか。
実際の出来事や、相手の状況を知る。

目的

その現実を、どう変えたいのか。
誰が、何をできるようになればよいかを捉える。

考え方

なぜその変化を善いと考えるのか。
何を大切にし、何を根拠に方法を選ぶのか。

何をつくるか、何を残すか、どう改善するか

共有した内容を、個々の判断に生かす

背景や目的を捉えるところから、AIと共に考えます。進める仕事が誰の何につながるかを確かめ、選ぶ理由を共有します。

引き継ぐAIと、何を実現したいか

顧客対応の引き継ぎを題材にした、説明用の架空例です。

AIが引き継ぎを担う場面

前任者の業務や判断理由を理解し、後任の質問にも答える。目的や改善案も提案できる、とします。

今の相手に起きていることを、共に確かめる

案内を受けても次に何をすればよいか分からず、顧客から同じ相談が繰り返されている。

AIと共に、目的と考え方を捉え直す

目的：顧客が、必要な手続きを進められるようにする。

考え方：対応を終えたかとともに、相手が次へ進めたかを大切にする。



AIと、案内の内容や対応の流れを検討する

案内に「次に行う手続き」「必要な準備」を示す案を、AIと比較します。使った後は、実際に手続きを進められたかを確かめます。

共有する目的が、仕事の向かう先を変える

AIの提案も、誰の何がよくなるかを共に確かめる。背景と目的を理解し、選ぶ理由を共有して進めます。

作業が進んでも、目的から離れることがある

ここからは、本資料の制作で、当社代表・甲畑智康とAIが交わした対話を扱います。

—

当初の問い

共に働く力を、何に向けるのか。
背景・目的・考え方を共有する意味を考える。



—

作業が進む中で

AIの案で、文章をどう直すかの説明が中心になり、
誰の何をより善くするかという問いが薄れた。



—

違和感から、主題を確かめ直す

読者が、AIと何を実現したいか考えられるように。
共働の力と、その向け先を改めて主題に据える。

「何か違う」も、理解を深める手掛かりになる

最初から、すべてを言葉にできなくても構いません。案への反応と、その理由を手掛かりに、目指すことを共に捉え直せます。

共に判断し直すことも、パートナーの仕事

ここからの提案 | 人間側とAI側の両方に求めたい働き

人間から伝えること

事情や願い。
案への違和感。
外したくないことと、その理由。

AIに求めたいこと

背景や目的への問い。
案の比較と、その選択理由。
情報・能力・権限の限界。

目的に照らして、方法を選び直す



仕事の受け手に 何が起きたか

資料やサービスを、誰が使ったか。

何に役立ち、何が難しかったか。
まだ分からないことは何か。

次の一件で、AIと確かめたい問い

「この仕事は、誰の何をより善くするためか。その目的から見て、次に何を確かめる必要があるか。」

イラストは、知識を仕事で使う場面のイメージです。利用成果を示しません。

この事例から言えることと、今後確かめること

事例の対象

本資料の制作で、当社代表の甲畑智康とAIが、共働する目的と伝えたいことを確かめ直した対話。

確認した 経過

AIの案が文章の修正手順へ狭まり、もとの問いとのずれを指摘して主題を捉え直した。

今後の提案

背景・目的・考え方を、判断と仕事に生かし続け、実際に関わる人への影響から見直す。

対話を手掛かりにした、単一事例の記述的・探索的な考察です。3ページの引き継ぎは説明用の架空例です。提案した進め方の効果は、今後、実際の仕事で確かめていきます。

関連研究との接点

Tankelevitchら（2024）は、生成AIを使う際の目的の言語化・出力評価などの負担と、AI側の支援を論じています。理論・設計上の論考です。

The Metacognitive Demands and Opportunities of Generative AI. CHI 2024.
<https://doi.org/10.1145/3613904.3642902>

Drososら（2024）は、15人のAI支援によるデータ分析を調べ、可能性と文脈指定・確認の難しさを報告しました。今回とは仕事と対象が異なります。

Understanding Generative AI-Assisted Data Analysis Workflows through a Participatory Prompting Study.
<https://doi.org/10.1145/3663384.3663389>

企画・事例提供：甲畑智康／作成：リクエスト株式会社
生成AIによる整理・編集・イラスト制作支援を使用 <https://requestgroup.jp/>

より善くを目的に。 知を社会へひらく。

リクエスト株式会社は、組織行動科学®を基盤に、組織で働く人の研究と教育開発に取り組んでいます。研究・実践で得た知を、働く人が自分の仕事で使える資料や、実践の機会として届けています。

成果につながる方法を、 本人が使える仕事へ。

方法を知ることから、仕事で判断し、実際に使い、見直すことへ。働く人の状況と仕事の条件、周囲の支援を一緒に考えます。

この資料を届ける理由

AIと共にできる仕事広がる今、その力を誰の何をより善くすることへ向けるか。今回の経験から生まれた問いを、組織で働く人が、自分の仕事を見直すための資料として届けます。

研究・教育開発の基盤

980社・33.8万人

当社公表の基盤規模です。本資料の単一事例とは対象が異なります。

公式サイト <https://requestgroup.jp/>

会社案内 <https://requestgroup.jp/corporateprofile>

資料の活用・研修の相談 <https://requestgroup.jp/request>